園芸

「はさみとのこを持つと気持ちが引き締まる」とサクランボの剪定をする軽部さん

期待の「紅秀峰」、産地化を促進

佐藤錦に次ぐ品種として「紅秀峰」の普及拡大を図っているのが、寒河江市下河原のサクランボ専業農家軽部賢一さん(59)。「ようやく寒河江市で産地化が進んできた。幻のサクランボから、スーパールーキーへ」と太鼓判を押し、飛躍に期待を込める。

同市三泉の農地百七十アールでサクランボを栽培する軽部さん。紅秀峰は着果が安定し食味に優れ、日持ちがいいのが特長。単価も高い。佐藤錦と組み合わせれば収穫期が延び、所得拡大にもつながると見込む。山形県JA園芸振興協議会会長だった今年七月、念願の紅秀峰品評会を東京で開いた。

「紅秀峰は四、五十年に一つ出るか出ないかの素晴らしい品種」と強調。

しかし、摘果作業などの管理面に手間が掛かる。剪定(せんてい)技術にこだわる職人のプライドと経験に裏打ちされた〝読みと勘〟の勝負だ。現在、さがえ西村山農協嘱託指導士会会長として若手への技術継承に力を入れている。「三泉地区では後継者が育っており全国に自慢できる」と胸を張る。「不景気、先行き不安で悲観していてもしょうがない。品質の良いおいしいものを作る原点に徹すれば希望も出てくる。自信を持って面白く、楽しくやるのが一番」とほほ笑んだ。